

『キラキラ輝く弥彦村』 実現の第一は議会の改革
『取り戻そう！村民主体の村政』
『皆さんの声を村政に』

(三条新聞合流点 平成二十九年十月二日 月曜日)

弥彦村九月議会で、経営改善(競輪事業等)調査委託費四百五十万円が提案されたが、五人組議員プラス一人の反対で否決された。実質六回目だ

今回は特筆すべきことがあった。二人の議員から競輪事業の利益に関係する発言があったことだ。本多啓三氏は、一般会計に繰り入れ金ゼロが続いたことに「一般会計が順調に回っているからで、必要なれば基金に積み立てるのが本来の姿」と質問したが、基金や施設整備費の積立金は増えている。あなたのがやってきた事と言っていることが違う、と村長に逆襲?

本多高峰氏は、大谷村長は民間所有の弥彦競輪場の寄付を受け、サテライト新潟を無償譲渡して経費節減を図ったとの質問に関連して、民間に払う必要のなくなった競輪場借り上げ料二億円はど

こに行ったか、当時の公営競技事務所に聞いたが返答がなかったと、疑問を呈した。

さらに裏話として、寛仁親王杯を開催したにもかかわらず、一般会計に繰り入れ金ゼロが続いたことに経済産業省・JK A・競輪事業協議会・選手会のいずれも「有り得ない」と言っていた。また競輪選手は、地方自治体の財政に貢献しているとの「誇り」を持っているとの話も紹介された。

合流点(7月1日)で「救世主となった構造改革と寛仁親王杯で大幅に増えた金は、どこに消えた」と指摘していたが、競輪選手が誇りを背に流した「汗の結晶」を本多啓三氏はどのように説明するつもりか。競輪の当事者からも疑問の声が上がったことは、巷間噂されてきた弥彦競輪の疑惑を、さらに深めたのでは

ないのか。さて、九月議会前に議員は小田原競輪場を視察したという。競輪場の運営や財務状況、業務委託、外部監査、一般会計への繰り出し等について勉強したはずである。資料によれば、小田原競輪場(車検売上額は弥彦と同規模)は外部監査を実施済みで、毎年一億円を一般会計に繰り出しているという。

否決された案件は、社会保障費の増大、公共施設やインフラ整備に莫大な税金が必要になるため、村が村として持続可能な基盤作り、つまり財政基盤の健全化対策だ。

反対議員は監査委員に失礼だ。職員に対する信頼性に欠ける。大谷氏の収支改善計画は職員が一丸となって取り組み、能力とノウハウがある。業務の有効性・効率性とは何か、などは反対理由には程遠く子供がダダをこ

ねてる程度のことしか言えないのか。的はずれなこじつけ主張でなく、弥彦競輪の運営が他より優れており、『外部監査の必要がない』という具体的な指摘があつてしかるべきである。視察したものの村政に反映できるものがなかったということか。

村民のための財政基盤強化策の否決は「村民を無視」したと言っても過言ではない。議会の重み・議会軽視・民意と言う前に「村民ファーストの政策」に反対の理由を明確にすべきである。

反対討論で六回も存在感を示した田中議員は「キラキラ輝く弥彦村」を実現する公約の第一が「議会改革」でした。本多啓三氏は「取り戻そう！村民主体の村政」、本多高峰氏は「みなさんの声を村政に」が公約の鑑でなかったか。

「火のない所に煙は立たぬ」というが、競輪会計のやみを突つくなということなのだろう。過去には相当の恩恵を受けた議員もいたそうだが、反対議員もその範疇に入るのかな。長年の疑惑から身の潔白を証明するために「外部監査せよ」となぜ言えない。村議会の常識は世間から見たら非常識はなほだしい。

三条新聞の「無題録」でも、外部監査は一般的に議会側から出ることが多い。弥彦村は逆で、首長が外部監査を提案しているのに議会が拒否している。「議会が監査に消極的では監視機能を疑われかねない」と指摘していた。

有権者の皆さん。否決を重ねる議員に関心を持ってください。(先々の財政が不安な弥彦村民)